

＜将来像ごとのまちの具体的なシーン＞

① 行きたくなる居場所づくり

▶ シーン 1 子どもが多様な体験・交流できる場所があるまち(学習・外遊び)

資源	深田公園／水辺・池・ビオトープ／虫や植物／人博の専門性／学校の環境学習／エキマエアキチや芝生で子どもが遊んでいる風景
課題・心配事	水辺は泥だらけで危険な場所もあり、安全確保が必要。草や木が伸び、ハチやマムシへの不安もある。子どもだけで行かせるには、トイレや見通し、暑さを避ける場所の面でも心配がある。 ひとはくイベントや使える場所が、近くに住む人に十分伝わっていない。「勉強に行く場所」という印象があり、気軽に行く居場所として認識されにくい。雨の日、暑い日、寒い日に、子どもや高齢者が安心して過ごせる屋内の居場所も不足している。 ひとはくの休憩スペース、自習できる場所、子ども向けイベントをもっと分かりやすく発信する。スーパー、駅前、学校、SNS など、日常的に目に入る場所で情報を届ける。冷暖房のある休憩場所としての使い方も周知する。
アイデア	水辺や里山の小道を安全に整備し、子どもが水遊び・虫とり・観察をできる場所にする。ひとはくや学校、地域ボランティアが関わり、単発ではなく継続的に学べる機会をつくる。
未来に必要な具体的なシーン	夏には小さな子どもが水鉄砲や水辺遊びを楽しみ、春や秋には小学生が虫とりや植物観察をしている。ひとはくの先生や地域のボランティアが「これは何の虫かな」と一緒に見てくれる。自然がただ残っているだけでなく、子どもが体験し、学び、また来たい場所になっている。 雨の日や暑い日、子どもや親子がひとはくに立ち寄り、展示を見たり、休憩スペースで本を読んだり、自習したりしている。研究員やボランティアに話を聞ける日もあり、「遠くから来る人の施設」ではなく、フラワータウンの人が日常的に使う学びと休憩の居場所になっている。

参加者の声:「深田公園の活用」「子どもたちが自然に集まって、元気に遊んでいる」「三田は水遊びができる場所がまずない」「先生が来てくれて、いろんな説明をしてくれる」

参加者の声:「博物館って言われたら構えちゃいますよね」「フラワータウンの人に来てほしい」「雨降ったら行って、自習しといでって思う」「そんな情報一切来ない」「ひとはくが近くにあるのは資源」

▶ シーン 2 中高生が放課後に過ごすことができるまち/ ▶ 多世代がおだやかに何気なく過ごせる場所

資源	サンフラワーの図書コーナー／エキマエアキチの建物／人博の休憩スペース・広いスペース／市民センター
課題・心配事	フラワータウンには落ち着いて勉強できる場所や図書館機能が少ない。既存の場所も「本が少ない」「人口に対して足りない」「使い方がわかりにくい」という声がある。放課後に行く場所がなく、商業施設や飲食店に集まるしかない状況もある。
アイデア	駅前や公共施設の一部を、自習・読書・待ち合わせができる場所として分かりやすく開く。図書機能や自習席を増やし、利用方法を見える化する。若者向け施設として、勉強だけでなく、少し話せるスペースも考える。
未来に必要な具体的なシーン	学校帰りの中高生が、駅前や公共施設に立ち寄り、自習したり、友達と少し話したりして過ごしている。家でも塾でもない、静かに過ごせる場所があり、「放課後に行く場所がある」ことが、若い世代にとっての安心につながっている。

参加者の声:「図書館がない」「本がすごい少ない」「自習施設、すごい求めているんだと思う」「マクドナルドなどに高校生がたまる。場所がほしい」「無料居場所」「自習室」

▶ シーン 3 多世代交流できる場所があるまち/ ▶ お年寄りに優しいまち

資源	エキマエアキチ／バスケットコート／芝生／子どもが遊んでいる風景／見守る大人・高齢者／商業施設前の人通り／市民センター／人博／地域のイベント／ボランティア団体／多世代交流できる活動
課題・心配事	暑さをしのぐ屋根や座れる場所が少ない。建物の入口が狭く入りにくい、車椅子では使いにくい、誰がどう使ってよいのか分かりにくいという声がある。高齢者や子育て世代が、買い物の途中で少し休める場所も求められている。
アイデア	芝生やバスケットコートを残し、屋根・ベンチ・テーブル・電源などを整える。施設の利用方法を分かりやすく掲示し、夏は休憩場所として開放する。スーパーや駅前の近くに、誰でも座れる休憩スペースをつくる。
未来に必要な具体的なシーン	エキマエアキチで子どもがバスケットや自転車遊びをしている。高齢者や保護者は、屋根の下ベンチやテーブルでそれを見守りながら休んでいる。遊ぶ人、見守る人、通りがかりの人が同じ空間にすることで、駅前に「若い人がいる」「元気をもらえる」景色が生まれている。

参加者の声:「7 時過ぎでも子どもたちが楽しく遊んでいます」「芝生を敷いてもらってから活用度がすごい上がった」「見るだけでも楽しい」「屋根があって、テーブルがあって、多世代が交流できる」「スーパーの前に休憩できる場所」

資源	地域のボランティア人材／人博の活動団体／学校支援／深田公園・池・里山／活動に共感する人／市民センターやひとはくなどの窓口になり得る場所
課題・心配事	ボランティアが無償だけでは継承しにくい。定年退職後の人が担うものというイメージがあり、若い世代や子育て世代に届きにくい。団体がばらばらに活動しているため、何をどこでやっているのか分かりにくい。保険・安全管理・交通費・情報発信も課題。
アイデア	SNS や掲示で活動の存在と魅力を発信する。交通費、保険、ちょっとしたお礼など、参加しやすい仕組みを考える。子どもも参加できる清掃・池掃除・自然観察を組み合わせる。ひとはくや市民センターが、活動情報をつなぐ窓口になる。
未来に必要な具体的なシーン	月に一度、公園や池を整える日がある。大人が草を刈り、子どもは生きものを探し、高校生や大学生も SNS で見て参加している。作業の後には、みんなでお茶を飲んだり、軽食を食べたりする。義務ではなく、「行ったら楽しい」「まちがきれいになって自分にも返ってくる」活動として続いている。 駅前や公共施設に行くと、今日のイベント、ボランティア募集、こどもの居場所、相談先が分かる掲示や窓口がある。高齢者は涼みながら休憩し、子育て世代は子ども向け情報を知り、中高生や大学生は参加できる活動を見つける。場所そのものが、世代と活動をつなぐ入口になっている。

参加者の声:「今日は草刈りしましょう、みんなが使いやすい場所にしましょう」「ボランティアって楽しいなという意識を広めたい」「子どもと一緒にボランティアできたら多世代交流もできる」「ボランティア団体がバラバラ。企画をデザインしてほしい」

参加者の声:「多世代交流できるイベントはエキマエアキチ」「交流の場を増やす」「地域のイベントや人が集まれる場所などが発信される場所」「人博の施設内のどこでも開くところがあれば、涼がとれる場所の常設化」

▶ シーン 4 ペットを連れて滞在できるまち

資源	深田公園の未活用エリア／散歩道／公園が多い環境／ペットを飼う人／犬友・猫の保護活動などの地域活動
課題・心配事	散歩道を犬がふさいで歩きにくい、こどもを安心して遊ばせにくいという不安がある。ペットを飼う人と飼わない人の使い分けや、マナーの共有が必要。動物を飼う高齢者のマナーや、犬のアレルギーがある人への配慮も必要。
アイデア	ドッグランやペット広場は、日常生活に支障のない場所を選び、柵でしっかり分ける。予防注射やマナー講習会、利用ルールを組み合わせる。ペットを通じたつながりを、見守りや孤立防止にもつなげる。
未来に必要な具体的なシーン	深田公園の一角に、散歩道とは分けられた小さなペット広場がある。犬を連れて人同士が自然に会話し、犬友のつながりができる。こどもが遊ぶ場所や歩く人の動線とは分かれているため、ペットを飼う人も飼わない人も、お互いに気持ちよく過ごしている。

参加者の声：「犬友が集まったらコミュニティができて、孤独な人も少なくなる」「柵とか、しっかり分ける場所として作ってくれたら、お互い気持ちよく過ごせる」「予防注射とマナー講習会」「犬好きの人同士がつながれるコミュニティがあると良い」

②「知りたい」が育つまち(学び・教育)

▶ シーン 1 関西学院大学の学生が、フラワータウンの子どもたちに勉強を教えているまち

資源	関西学院大学／学生の得意分野／こどもの放課後時間／ エキマエアキ・人博 ・ 市民センター など集まりやすい場所
課題・心配事	地域には大学が近くにある一方で、こどもが気軽に勉強を見てもらえる場や、学生と地域が自然につながる機会は十分に見えていない。個人で大学に声をかけるのは重たく、継続の仕組みも必要。
アイデア	関学生や学生ボランティアが、得意な教科・研究・スポーツなどをこどもに教える機会をつくる。市民と大学でセミナーを行い、ひとはくやセンター地区を窓口にして、単発ではなく続く関係にする。
未来に必要な具体的シーン	放課後、子どもたちがセンター地区や人博に集まり、関学の学生に宿題や調べ学習を見てもらっている。こどもにとっては「近くに少し年上のお兄さん・お姉さんがいる」安心感があり、学生にとっても地域と関わる学びの場になっている。

参加者の声: 整理フレームでは「関学の学生がフラワーの子どもたちに勉強を教える」というシーンが設定され、「関学がある」「市民と大学でセミナー」「人を呼び込む手段」などの意見がつながっていました。

▶ シーン 2 こどもも大人も、人博に集まって学ぶまち

資源	人博 ／研究員・専門家／イベント・展示／ 深田公園 との近さ／ボランティア／関西学院大学／市内高校／有馬高校などの専門性／スポーツや研究活動をしている学生
課題・心配事	・人博は大きな資源だが、近くに住む人にとって「気軽に使う場所」として十分に伝わっていない。こども向け、大人向け、高齢者向けの学びがバラバラになりやすく、情報も届きにくい。 ・地域の個人や自治会だけで大学・高校・専門家に声をかけるのは重たく、個人に負担がかかる。やりたい人はいても、誰に相談すればよいか分からず、活動がバラバラになりやすい。
アイデア	・こども向けイベントだけでなく、大人も参加できるセミナー(大学連携等)、研究員のミニレクチャー、地域ボランティアとの活動を増やす。スーパーや駅前、学校、SNS など日常的に目に入る場所で情報を発信する。 ・人博、高校、大学が連携した中間支援的な窓口をつくる。スポーツ指導、自然観察、セミナー、地域活動の相談などを、個人ではなく窓口を通してつなぐ。まず市民が大学や高校に学びに行く機会をつくり、出合いを地域活動へ戻していく。
未来に必要な具体的シーン	・雨の日や暑い日、こども、親子、高齢者、学生がひとはくに立ち寄り、展示を見たり、研究員の話を聞いたり、休憩スペースで本を読んだりしている。「遠くから来る人の施設」ではなく、フラワータウンの人が日常的に学びに行く場所になっている。 ・人博を入口に、「こんな活動をしたい」「学生に少し関わってほしい」「高校の専門性を活かしたい」という相談ができるようになっている。スポーツをしている関学の学生がこどもに教えたり、高校生が花や環境の知識を地域に還元したりして、学校とまちが顔の見える関係になっている。

参加者の声: 「ひとはくや公園が、もっと身近な『学びと休憩の居場所』になる」と整理され、参加者からは「あそこで学生勉強してほしい。おじいちゃんおばあちゃん涼んでほしい」

「月1でサイエンスカフェ」などの声が出ていました。

参加者の声: 参加者からは「中間支援組織。個人でやっていたら、その辺をつなげてくれる窓口がいる」「人博と高校と大学で」「関学のスポーツをやってる有志に来て、地域のこどもにいろいろ指導してもらおうか」という声がありました。

▶ シーン 3 自然と触れ合いながら学ぶまち

資源	深田公園 ／雑草・植物・虫／水辺・ビオトープ／自然がいっぱいある環境／ 人博 の専門家／毎日のように公園を見ている住民の経験／ボランティア／関西学院大学／フラワータウンという名前／ 駅前花壇 ／有馬高校などの園芸・植物の知識／花苗づくり／植えに来られる住民・ボランティア
課題・心配事	・草刈りは「伸びたら刈る」の繰り返しになりがちで、草木が伸びるとこどもが遊びづらく、安全面も心配になる。ポイ捨てや管理も、個人で続けると「バツとやめたら終わり」になってしまう。 ・「フラワータウン」といっても花がほとんど見当たらない。雑草ばかり」という実感がある。花を植えても、手間がかかりすぎると続かない。どんな花をどこに植えればよいか、管理の仕方も分りにくい。
アイデア	・雑草をただ抜く・刈るだけでなく、「どうすれば種をまかないか」「3年かけて減らすにはどうするか」を、こども・住民・学生・専門家が一緒に学ぶ。自然観察、虫とり、水辺の手入れ、農業や植物の話を組み合わせる。 ・高校に花苗づくりや植え方の提案をもらい、住民が植えに来る。あまり手がかからない花、場所に合う花、何年か後にどうなるかを学びながら、実際の花壇で試す。販売するだけでなく、まちへの貢献としてつなげる。
未来に必要な具体的シーン	・深田公園で、こどもと大人と一緒に「公園の植物観察と手入れの日」に参加している。雑草を抜きながら、「これは何の植物か」「なぜ毎年生えるのか」「どうしたら減らせるのか」を研究員や住民が話してくれる。公園管理が単なる作業ではなく、自然と生活の仕方を学ぶ時間になっている。 ・駅前や遊歩道、花壇に、高校生が育てた苗が植えられている。住民は「どの花がこの場所に合うか」「どう育てると長く楽しめるか」を教わりながら作業する。高校生にとっては、自分たちの学びがまちに残る経験になり、住民にとっては「フラワータウンらしさ」を取り戻す活動になっている。

参加者の声: 参加者からは「伸びたら草刈る、伸びたら草刈る、毎年同じことを繰り返している」「雑草を絶滅させようとするとなんとか 3 年かかる」「植物の成長とはこんなもんやと、

こどもに教えてあげる」という声がありました。

参加者の声: 参加者からは「ここフラワータウンといっても花がほとんど見当たらない。雑草ばかり」「有馬高校で花の苗を作ってもらって、ここへ住民がボランティアで植えにくる」「あんまり手がかからないのをどうやったら植えられるか」という声がありました。

▶ シーン 4 ボランティアが溢れてつながれるまち

資源	公園・遊歩道／ゴミ拾い・草刈りをしてきた住民／高齢者の時間と経験／趣味サークル・地域団体／市民センターや空き時間／人博
課題・心配事	無償のボランティアだけでは長続きしない。「ありがとう」と言われない、置き場所で注意されるなど、報われない経験もある。個人で続けると孤立し、活動が見えにくい。
アイデア	ボランティアをしたサークルや個人が、市の施設を空いている時に無料で使える、ゴミ袋をもらえる、ポイントを得られるなど、分かりやすい見返りをつくる。お金だけではなく、活動が続くための制度・デザインを考える。インセンティブ付ボランティアのデザイン。深田公園・人博を核に、キャンプや BBQ を中心としたまちの再構築、ルールを決めて運用。人博や寿の湯も巻き込んでいく。博物館をたまれる居場所に。
未来に必要な具体的シーン	月に一度、公園や遊歩道で「まちを整える日」が開かれている。ゴミ拾いや草刈りをした後、参加したサークルは市の施設を練習場所として使えたり、ポイントを受け取れたりする。こどもは大人の背中を見て、「まちをきれいにすることも学びなんだ」と感じている。

参加者の声:整理フレームでも「ボランティアがあふれてつながるまち」として意見が広がり、参加者からは「全く無償だったら長続きしない」「市の施設を空いてる時に無償で提供してもらおう」「ボランティア活動は教育につながっていく」という声がありました。

③ 非日常なにぎわい

▶ シーン 1 多世代交流なまち

資源	エキマエアキチ／キッチンカー／新しいイオン／サンフラワー／多世代が交流できるイベントの場
課題・心配事	駅前で何かをしていても、内容や開催日が分かりにくい。自治会活動や敬老会、夏祭りなど、地域の行事は高齢化や担い手不足で継続が難しくなっている。現役世代が地域活動に参加しにくいという心配もある。
アイデア	キッチンカーやグルメイベント、地域の小さな催しを定期的に行う。エキマエアキチを、多世代が立ち寄れる交流の場として使う。チラシ、掲示、SNSなどで「今日は何をしているか」が分かるようにする。
未来に必要な具体的シーン	エキマエアキチにキッチンカーが並び、子ども連れの家族、高齢者、仕事帰りの人がふらっと立ち寄っている。買い物ついでに顔を出す人、子どもを見守る人、久しぶりに会話する人がいて、駅前に「少し特別な日」のにぎわいが生まれている。

参加者の声：「行ってみないと何をやっているかわからない」「告知がもっと分かりやすければ、行ってみようと思える」「能登の炉端焼きみたいなイベントは、たくさん人が来ていた」「おじいちゃんもおばあちゃんも子どもたちも来れる」

▶ シーン 2 子育て世代が帰ってくるまち

資源	小学校校庭／地域の夏祭り／自治会活動／お盆に帰省する人／子ども向けイベント／地域のつながり
課題・心配事	子育て世代や 20～40 代の人口をキープできるのかという不安がある。自治会の担い手が減り、祭りの準備や片付けの負担が大きい。お酒の扱い、マナー、責任問題など、続けるためのルールづくりも必要。
アイデア	小学校の校庭などを使い、夏祭り・ふるさと祭り・子ども向けイベントを続ける。帰省した子ども世代が同窓会のように集まれる場にする。自治会だけで抱え込まず、単発ボランティアや地域の人が少しずつ手伝う。
未来に必要な具体的シーン	お盆の時期、小学校の校庭でふるさと祭りが開かれている。今住んでいる人、帰省してきた人、子育て世代、子どもたち、高齢者が集まり、「久しぶり」「大きくなったね」と声をかけ合っている。祭りは、自治会だけでなく、手伝える人が少しずつ関わる形で続いている。

参加者の声：「子どもが帰ってくるような祭りがほしい」「お盆に帰ってくる」「そこで同窓会ができればいい」「子ども向けイベントを増やす」

▶ シーン 3 人を呼び込むまち・音楽を楽しめるまち

資源	人博／堅穴式住居／深田公園／円形劇場・芝生広場／地域の事前イベント／駅前から歩ける立地／自然環境／関西学院大学／市民センター／市内の吹奏楽団・アマチュアグループ／中学校の吹奏楽部・マーチング／昔あった映画上映や演奏会
課題・心配事	・地域外の人にフラワータウンの魅力が伝わりにくい。PR 不足や駐車場の使いにくさがある。イベントをしたくても、場所の管理者、許可、電気、火気、ゴミ処理などの調整が必要になる。 ・深田公園：昔は活用されていたが、今は使われる機会が少なくなっている。円形劇場や広場で音を出すと、近隣マンションなどに反響し、騒音の苦情につながる可能性がある。草が多く、座って過ごしたいと思にくい場所もある。責任問題、安全性
アイデア	・人博や深田公園を入口に、自然、歴史、食、体験を組み合わせたイベントを行う。三田屋など地域の事業者と連携したグルメ企画、フリーマーケット、ワークショップ、漫画イベント、グランピング的な体験などを試す。学生アドバイザー ・年に 1 回だけ「音楽の日」をつくる。時間帯・音量・場所を決め、事前に周知する。中学生のマーチング、アマチュアグループの発表場所、地域の吹奏楽団、地域バンド、映画上映などを組み合わせる。開催前に草刈りや清掃を行い、使える場所として整える。小学校の校庭や体育館でボランティアを募り、楽しいものとして開放することができないか。
未来に必要な具体的シーン	・休日に、人博や深田公園を目的に地域外からも人が訪れている。午前中は人博や自然体験、昼は公園でグルメイベント、午後は円形劇場や駅前でワークショップやフリマを楽しむ。フラワータウンの中で回遊が生まれ、「住宅地だけではない、行ってみよう」として知られている。 ・年に一度、深田公園や円形劇場で「フラワータウン音楽の日」が開かれている。芝生にレジャーシートを敷き、子どもから高齢者までが、吹奏楽やマーチング、地域バンドの演奏、野外映画を楽しんでいる。近隣への音の配慮として、開催日・時間・音量を事前に共有し、「この日だけはまちで楽しむ日」として理解を広げている。

参加者の声：「人博」「堅穴式住居」「PR をもっとした方がいい」「深田公園でバーベキューがしたい」「フリマやワークショップもできる」

▶ シーン 4 公共施設をイベントなどに利用できるまち

資源	市民センター／人博／地域の文化活動／音楽、ダンス、落語、漫画、アート／発表したい人・見たい人／サークル活動／深田公園、遊歩道、自然環境／地域の人材／ボランティア意識／里山活動／市の通報システム
課題・心配事	・市民センターで行われていた文化祭や発表の場が、今後どうなるか不安がある。活動している人はいるが、発表の機会や情報発信が十分ではない。施設の予約、主催者、調整役も必要。 ・草が多く、座ったり遊んだりしにくい。木が茂って暗くなり、子どもの安全面が心配。市だけでは維持管理が追いつかない部分がある。一方で、勝手にやってよいわけではなく、管理者との調整、安全管理、責任問題も必要。
アイデア	地域の文化祭を続ける。音楽、ダンス、落語、漫画、アートなどを発表できる場をつくる。市や施設が情報発信を行い、出演したい人・見たい人を募集する。公共施設の利用方法を分かりやすくする。
未来に必要な具体的シーン	・市民センターや駅前の公共空間で、地域の文化祭が開かれている。ダンスを習う子ども、地域の音楽グループ、落語、漫画やアートに取り組む人などが発表している。プロでなくても参加でき、見る人も「こんな人がフラワータウンにいたんだ」と知るきっかけになっている。 ・月 1 回の草刈りボランティアやゴミ拾いイベントを行う。子ども連れでも参加できる清掃イベントにする。市はアドバイザーや調整役として関わる。危険箇所は通報システムも活用する。 ・月に一度、公園や遊歩道で「まちをきれいにする日」が開かれている。草刈りをする人、子どもを見守る人、終わった後にお茶を飲む人など、それぞれができる形で参加している。単なる作業ではなく、「きれいになった場所で次のイベントができる」という楽しみにつながっている。

参加者の声:「市民センターで文化祭みたいなことをやっていた」「演奏だけでなく、いろんなことを披露したい人がいるかもしれない」「せっかく披露の場所があるんだから活用できたらいい」「漫画イベントも面白い」

参加者の声:「月一回みんなで草刈りボランティアしよう」「ボランティアは楽しいものだという意識に変えていく」「市だけに頼るのではなく、自分たちがどう動けるか」「危険なところは通報システムも使える」

④ 交通・移動

▶ シーン 1 こどもがひとりで自由に買い物・習い事に行けるまち

資源	電車・路線バス／イトマンなどの習い事施設(サンフラワー)／エキマエアキ／地域クラブ／学校・体育館／見守りの目／子ども同士の交流 むこぐるぐる／地域の見守りの目／まちの人の温かさ／自治会・まち協など地域の担い手／バス停につながる道
課題・心配事	「こどもがひとりで自由に駅前や習い事に行けるか」という視点では、親の送迎が前提になりやすいこと、中学生になると大人料金になること、帰りが暗くなる時間帯の安全性が心配。共働き家庭では、送迎できないため活動を諦めることもある。 むこぐるぐるはルートや乗降場所が決まっている。一方向で、帰りは遠回りになる場合がある。時速が遅く、交通の邪魔にならないか、事故時の責任、ドライバー不足も心配。
アイデア	子ども向けの低額運賃、定期券、100 円券のような仕組みを検討する。地域クラブや習い事の時間に合わせた移動支援を考える。保護者の相乗りだけに頼らず、公共交通や地域交通で行ける選択肢を増やす。 むこぐるぐるは一方向だけでなく逆回りも検討する。時間帯や利用対象を広げる。高齢者だけでなく、買い物帰り、放課後、夕方の見守り移動にも使えるようにする。まずは実験を重ね、使い方を具体化する。
未来に必要な具体的シーン	小学校高学年や中学生が、親の送迎がなくても、駅前、ウッディタウン、三田本町方面の習い事・地域クラブに行ける。帰りが暗くなる時間帯も、見守りや公共交通と組み合わせて安全に帰れる。子どもの「行きたい」が、送迎の有無だけで決まらない。 武庫が丘だけでなく、フラワータウン内の各地区に小さな移動手段が広がっている。バス停まで歩くのが大変な人、買い物帰りに荷物を持つ人、夕方に子どもを見守りながら帰す人が、それぞれの目的に合わせて利用している。

参加者の声:「あるのに機能しきれていない、活用できていないのはもったいない」「一方向しかルートがなくて、帰りはぐるっと回らないと帰れない」「時間帯の拡大とか、ターゲットを変えていくという考え方」

参加者の声:「子どもはお使いに行かない。習い事で外に行くことが多い」「中学生になると大人料金」「送迎できないから諦めさせるとか、それはいっぱいある」「自分で動けたら行きたい」

▶ シーン 2 フラワータウンと他地区を気軽に行き来できるまち

資源	フラワータウン駅／ウッディタウンの商業・学び・交流機能／大阪・神戸方面への便／電車・路線バス／自転車／友達や習い事先 電車／路線バス／高齢者向け補助・回数券／既存の運行本数／バス停／雨天時の交通手段／利用者の声 大阪・神戸方面への高速バス／三宮直通バス／電車／駅前の交通結節点／学生・現役世代の外出ニーズ／交通情報を届ける場所
課題・心配事	フラワータウン内だけで必要なものを完結させるのではなく、ウッディタウンなど他地区と補完し合う必要がある。一方で、運賃の高さ、高低差、自転車で行く危険・しんどさが移動のハードルになっている。整理フレームでも「他地区との交流を図るための手段」が課題として挙がっている。 電車やバスは存在していても、運賃の心理的ハードルが高く、車や自転車が選ばれやすい。中学生や子育て世代、買い物利用では「往復運賃を考えると行かない」という判断になりやすい。雨の日や坂道では、自転車以外の手段が必要になる。 大阪・神戸方面へは便利な移動手段がある一方で、知られていない、使い方が分かりにくい、廃止・減便されると困るという声がある。外出手段があっても、周知不足で利用につながらないことがある。
アイデア	・フラワー・ウッディ間の子ども料金やお助けキャンペーン、短距離定期などを検討する。商業・学び・地域クラブ・友達との交流など、目的別に使いやすい移動を整理する。自転車だけに頼らない移動の選択肢を持つ。 ・子どもや高齢者、短距離利用者向けの割引・回数券・キャンペーンを検討する。雨の日だけ使う、坂道だけ補う、短い距離だけ使うなど、利用場面を細かく整理する。使う人を増やすことで、路線維持や復活につなげる。 ・駅前や市民センター、学校、大学、SNS 等で交通情報を分かりやすく発信する。目的別に「大阪・神戸へ行く」「市民病院へ行く」「イオンモールへ行く」「雨の日に使う」などの使い案内をつくる。 ・道路整備など、車いすへの対応・ユニバーサルデザイン
未来に必要な具体的シーン	・フラワータウンの子どもや高齢者が、ウッディタウンの図書館、習い事、友達の家、買い物先へ気軽に行ける。逆に、ウッディタウンの人もフラワータウンの公園や施設に来る。地区同士が行き来し、まち全体で機能を補い合っている。 ・フラワータウンから大阪・神戸・三宮方面へ行くバスや電車の情報が分かりやすく整理され、学生、子育て世代、現役世代が目的に応じて使い分けている。外へ出かけやすいことが、フラワータウンに住む魅力の一つとして共有されている。

参加者の声:「フラワータウンからウッディタウンに行く選択肢を増やす」「何個かの地区で必要なものを補完していくのが今後の街づくり」「ウッディまで 100 円で行かせてくれたらめっちゃ行きますよ」

参加者の声:「大阪とか神戸に行くバスがあるのは、週末に出かける時には便利」「知ったら使いますか」「もっとチラシをまいていたら利用者が多かったかもしれない」

▶ シーン 3 誰でも自由に買い物ができる場所が選べるまち(生活ができるまち)

資源	路線バス／バス停／むこぐるぐる／タクシー／坂道の少ないルート／地域の助け合い／病院・ごみステーション／身近な買い物先
課題・心配事	高齢になると、ゴミ出し、通院、ワークショップ参加、バス停までの坂道など、日常の小さな移動が大きな負担になる。タクシーは便利だが費用がかかる。近くに買い物先がない場合、車を手放した後の生活のしやすさが不安になる。
アイデア	バス停から目的地までの「最後の坂道」「最後の数百メートル」を補う仕組みを考える。既存のバスと小さな移動手段、タクシー、地域の見守りを組み合わせる。病院・買い物・ゴミ出しなど、生活目的ごとに移動の困りごとを地図上で確認する。
未来に必要な具体的シーン	・車を手放した後も、病院、市民センター、買い物、ゴミ出し、地域活動に参加し続けられる。高齢者は自分に合うバス停や坂道の少ないルートを選べ、小さな移動手段がその間を補っている。「車がないと生活できない」ではなく、「車がなくても

	生活できる」まちになっている。 「ちょっと行きたい」「雨の日だけ使いたい」「子どもだけで行かせたい」という短い移動でも、公共交通を自然に選べる。自転車に乗れない日や、坂道がしんどい時にも移動を諦めずに済む。使う人が増えることで、バスや電車が地域の生活の選択肢として残っている。
--	--

参加者の声:「今日ここまで歩いてくるのに 4 回ぐらい座って歩き座って」「病院とかもタクシー呼べば済むけど費用がかかる」「降りてからの坂道がないから、別のバス停まで乗って歩いて帰る」

参加者の声:「運賃は絶対ハードル」「15 分に 1 本電車があるのに、使えたら便利。でも使わない」「料金を下げて人が増えたら街が活性化されるんじゃないか」

⑤ 若者の定着

▶ シーン 1 若者が住み続けられるまち

資源	・人博／深田公園の四季折々の景色／広い緑地、自然、博物館、駅からの近さ／フラワータウンという名前と花・ガーデンのイメージ ・新しいイオン周辺／過去に使われていたダイエー・イオン・自習室の記憶／図書館やふらっとなど既存の居場所／学生・高校生が実際に自習場所を求めていること ・大規模マンション、住民の多様性／既存の管理組合・自治会の仕組み／掲示板や紙の連絡網／若い住民・外国人住民の視点
課題・心配事	・博物館・公園の魅力を地元の人でも当たり前に見過ごしている／若者が行きたいと思うカフェ・おしゃれな場所が少ない／滞在時間を生む機能が不足している／駐車場や入場の使いやすさを考える必要がある ・「寄り道する場所がない」／図書館は席の取り合いになりやすい／静かに勉強する場所と、少し話せる場所が分かれていない／地域情報・イベント情報が若者に届きにくい ・紙中心で、平日 9 時～17 時の窓口に合わない／問題やクレームの提出方法が古く感じられる／若者が住みやすい仕組みに更新されていない／情報が届く人・届かない人の差が出やすい
アイデア	・公園を見渡すカフェ、書店・図書館機能を併設／恐竜カフェ、フラワーカフェなど人博・まちの個性を出す／SNS 映えするベンチ、花壇、展示、撮影スポットを設ける／アウトドア体験や学びイベントを定期開催 ・個室型自習ブース、電源、Wi-Fi を備えた学びスペース／飲食できるカフェ席と静かな自習席を分ける／若者向け掲示板・デジタルサイネージを設置／夜や休日でも使いやすい開館時間を検討 ・管理組合・自治会の連絡アプリを試行／紙とデジタルを併用し、高齢者も取り残さない／多言語・やさしい日本語の案内を検討／地域行事や困りごと相談も同じ仕組みに載せる
未来に必要な具体的シーン	・人博・深田公園・駅・駐車場が一体のエリアとして使われている。若者はカフェで勉強し、家族はアウトドア体験に参加し、来訪者は花や恐竜をきっかけに立ち寄る。深田公園の眺望が、まちの目的地になっている。 ・学校帰りの高校生・大学生が駅前に立ち寄り、自習、読書、友達との会話、地域情報の確認をしている。「学校→駅前→自習・カフェ→帰宅」の動線ができ、若者がフラワータウンに残って過ごす時間が増えている。 ・修繕・困りごと・駐車場・ペット・地域行事の連絡を、紙・掲示板・アプリで併用している。夜間や平日昼に窓口へ行けない人もスマホで相談・申請でき、若者、外国人、子育て世帯、高齢者が同じ情報にアクセスしやすくなっている。

参加者の声：「フラワーはポテンシャルしかない。こんなにポテンシャルがあっても生かされてないから、めっちゃくちゃもったいない。」／「深田公園あるし、そこに博物館あるし。自然、博物館、広い緑地を生かして人が集まる。」／「公園を見渡すスタバができれば、どれだけ都会から人が寄せられるか。」

参加者の声：「フラワーに自習室あって、それめっちゃ活躍したんですけど、高 3 になった瞬間なくなって、めっちゃ悲しい。困る。」／「図書館行ってるらしいんですよ。開館の 15 分前で行ったけど、めっちゃ並んで、もう席の取り合いみたいなの。」／「ポスター貼ってるなぐらいでも、こんなイベントあるんだとか。自分ではやっぱ調べない。」

参加者の声：「今 AI の時代になってるじゃないですか。アプリみたいな。」／「みたいのがあれば、多分若い人たちも住みやすいかなと思ってます。」／「自治会も管理組合も、もう少しアップデートしてくれて、紙じゃなくなったら助かることがたくさんある。」

▶ シーン 2 若者が働き続けられるまち/通勤しやすいまち

資源	近くにテクノパークがあること／地元企業・起業経験者がいること／優秀な住民・若者人材／駅前交通結節点
課題・心配事	仕事のチャンスが少ないと感じられている／テクノパークへ行く手段が弱い／働く場所が市外に広がり、若者が出ていきやすい／企業情報や求人が若者に届きにくい
アイデア	通勤時間帯の実験バス・シャトル・予約制交通を検討／駅前にコワーキング、求人揭示、企業紹介スペースを設置／地元企業と学生の交流会、インターン、職場見学を実施／空き店舗を起業相談・小商いの実験場所にする
未来に必要な具体的シーン	朝夕にテクノパーク方面へ行きやすいバス・シャトル・相乗りが試されている。駅前にはコワーキングや企業情報の掲示があり、学生や若者が「三田で働く」「三田で起業する」選択肢に触れている。

参加者の声：「住むにはやっぱ働くのが必要やから働き続ける町。」／「仕事のチャンスが少ないと感じてますね。近くにテクノパークがあるんですけども、なかなか会社が少ない。」／「ここからもテクノパークに行きやすいルートがあれば、ここに住もうってなりますし。」

▶ シーン 3 若者が帰ってきたくなるまち

資源	夏祭りや地域行事の記憶／ヨーヨーなど子ども・若者の得意なこと／台湾料理・餃子など多文化の食の魅力／子育てしやすい、自然があるというまちの印象
課題・心配事	自治会が疲弊し、行事が縮小している／若者が帰ってくる理由が施設だけでは弱い／花火がなくなり寂しいという声がある／担い手・安全管理・費用の課題がある
アイデア	実行委員会型で祭りを再構築／若者や子どもが出演・運営に関われる仕組み／小さな花火、光の演出、音楽、食の企画を段階的に実施／地域の友達と再会できる日をつくる
未来に必要な具体的シーン	センター地区、駅前、深田公園、学校などで、若者・学生・子育て世帯・外国人住民も関わる夏祭りが開かれている。花火、ヨーヨー、台湾料理、餃子、地域の屋台が並び、帰省した時に友達に会える「故郷の記憶」になっている。

参加者の声：「結局故郷やりかねて私思ってるのね。夏祭りとか地域の行事とか、友達とお祝いするの楽しかったよ。」／「花火欲しいよね。絶対。」／「例えば祭りを自分たちでやってみようっていう感じがあったら、参加したいなって思います。」

▶ シーン 4 こどもを育て続けたいまち

資源	落ち着いた住宅地／空き家・空き部屋の可能性／住民の得意なこと、食文化、趣味／緑道や公園に近い歩ける環境
課題・心配事	新たな分譲住宅を建てる土地が少ない／住宅地の用途規制により店舗化が難しい可能性／若者が住みたいと思うおしゃれな店・巡れる場所が少ない／個人だけでは創業・改修のハードルが高い
アイデア	規制・ルールを確認し、実証的に小規模店舗・予約制店舗を試す／空き家を若者向け住まい、店舗兼住居、シェアスペースに活用／食べ物、雑貨、教室、ギャラリーをまち歩きマップ化／創業相談や小規模改修支援を組み合わせる

未来に必要な具体的シーン	週末や平日昼に、住宅地の中のおうちカフェ、焼き菓子、台湾料理、ギャラリー、小さな教室を巡る人がいる。若者は「住む場所」と「小さく働く場所」を近くに持て、子育て中の人やシニアも散歩の目的地として使っている。
--------------	--

参加者の声:「今後その子世代が住み家がない。新たな分譲住宅建てる土地がないじゃないですか。」／「やっぱあとは空き家の活用とかですか。人口増やすとしたら。」／「住宅街にカフェあったらなんか巡りたくなりますもんね。それで私も住みたいなと思います。」

⑥ DIY 的まち整備

▶ シーン 1 みんなでつくる歩きやすい安全なまち

資源	通学路、通勤通学に使う主要な生活道路、草や街路樹が伸びやすい道路際・通路際
課題・心配事	雑草や街路樹が伸び、ハチも出て安全面が心配。高齢化で膝・腰が痛く、担い手の負担が大きい。車道沿いの草刈りは石が飛ぶ、ガードマンが必要など、住民だけで担うには危険な作業もある。
アイデア	通勤通学路・主要な生活道路を重点路線として地図化する。見守りや散歩中に気づいた危険箇所を通報・共有し、住民でできる軽作業と行政・業者が担う作業を分ける。
未来に必要な具体的シーン	こどもが安心して歩ける通学路や生活道路を、地域と行政が一緒に見守っている。住民は日常の中で「草が伸びて歩きにくい」「蜂がいて怖い」「見通しが悪い」場所を見つけて共有し、危険作業は行政・業者、軽作業は地域で対応する。地図上では、住民で見回る場所と行政対応が必要な場所を色分けして確認できる。

参加者の声:「公園とかやっぱり木が生い茂ってたり、雑草があったりすると危ない」「蜂がいて怖い」「街路の草刈りは仕事できないんですよ。車通るしね」「通勤通学路、それと主要な生活道路、そこはみんなで綺麗にしましょう」

▶ シーン 2 みんなでつくる「花」のまち

資源	フラワータウンという名前、駅前の花壇、各公園の花壇、花の会・熟年部会、園芸好きの住民、有馬高校の園芸・苗づくりの可能性
課題・心配事	花壇の担い手が高齢化し、継承できていない。雑草化すると撤去され、まちが寂しくなる。苗代や水やりなど、個人だけでは負担がある。自治会だけに投げると続かない。
アイデア	市が花壇やプランターを「里親」として貸し出し、希望する団体・個人が管理する。苗の提供、有馬高校や園芸家による花の種類・植え方・季節ごとの見せ方のアドバイス、管理者への感謝表示を組み合わせる。
未来に必要な具体的シーン	駅前や歩道橋、公園の花壇に、地域の人が育てた花が咲いている。花壇には「里親」の名前や活動紹介があり、通りがかりの人が「きれいですね」と声をかける。高校生や園芸家の助言で、手がかかりすぎず、季節ごとに楽しめる花が選ばれている。フラワータウンという名前にふさわしい景色が少しずつ戻っている。

参加者の声:「駅前のそこ花植えてもらう大きな緑のボックスがあった」「橋の上に、だらっと植木鉢みたいな」「花が好きの人って、いろんなところ植えたい」「有馬高校とか、専門の園芸家に工夫してもらって」

▶ シーン 3 みんなでつくる自然が身近なまち

資源	各丁目の公園、深田公園ビオトープ周辺、自治会の清掃エリア、駅前・歩道橋周辺、クリーンデーの経験、こどもの力、虫取りや自然観察につながる環境
課題・心配事	・ボランティア精神だけでは人が集まりにくい。地域ごとの清掃だけでは参加が限定され、若者やこどもが関われる入口が少ない。整備だけだと重労働に見え、楽しくない。 ・自治会加入者だけに参加に限られることがある。無償ボランティアだけでは継続しづらい。行政担当者の異動で取り組みが途切れる。個人活動が見えにくく、支援につながりにくい。 ・自然はあるが、整備されず使いにくい場所がある。放置すると草や水辺が荒れ、子どもが入りにくくなる。整備だけでは参加の動機が弱く、行政から地域へのパトナタッチも必要。
アイデア	・通常のクリーンデーに加え、親子で参加する「ゴミ拾い大会」「草引きチャレンジ」「虫取りしながらビオトープ整備」を行う。作業成果を見える化し、交流や小さな景品も組み合わせる。 ・市が窓口となり、団体・個人を登録する。草引き、ゴミ拾い、花壇管理、公園見回りなどの活動に応じて、ゴミ袋、施設の空き時間利用、無料パス券、ポイント、感謝状などを付与する。 ・虫取り・自然観察・整備を組み合わせたいイベントにする。人博や専門家の助言を受け、安全に実施する。行政が初期整備、地域が日常管理を担う形にし、整備後の変化を掲示する。
未来に必要な具体的シーン	・公園やビオトープで、親子・学生・シニアと一緒に整備イベントに参加している。こどもは虫を探しながら草を抜き、大人は刈った草やゴミをまとめる。作業後には成果を掲示し、少し交流する時間がある。単なる清掃ではなく、「行ったら楽しい」「まちがきれいになる」活動として続いている。 ・「団体には入りたくないけど、ボランティアはしたい」人も参加できる登録制度がある。活動場所や内容は市民センターなどで確認でき、参加した人にはゴミ袋や施設利用、ポイントなどの小さな見返りがある。無償の善意だけに頼らず、活動したことが見える・感謝される仕組みとして続いている。 ・深田公園やビオトープが、子どもが遊びながら学べる自然の学び場になっている。最初に行政や専門家が安全面を整え、その後は地域が小さく手入れを続ける。虫取り、水辺観察、生き物調査と整備を一緒に行うことで、子どもも大人も「自然を使うこと」「自然を守ること」を同時に学んでいる。

参加者の声:「こどもと一緒にやるとこどもたちって結構戦力になる」「お年寄りだけではなく、いろんな人が参加できるような、イベント的に」「虫取りながら整備しようとか」「ただ重労働するだけみたいな感じ」

参加者の声:「草が伸びたら刈る、伸びたら刈る」「伸ばしてしまったら種が散らかって、何年かかっても同じように生える」「種ができる前に刈るという発想」「クローバーとか、今の間やったら簡単にできる」

参加者の声:「ボランティアでゴミ拾ったり、公園の草引きとか、いろんなことを自分自身でやったり」「全く無償だったら長続きしない」「施設をそういう団体に貸してあげる」「無料パス券とか」「団体には入りたくないけど、ボランティアはしたい」

参加者の声:「深田公園の池の部分ありますよ。ビオトープ。あそこぐちゃぐちゃなんです」「子供がちょっと入って遊べる」「虫取りながら整備しようとか、楽しいイベントにして」「行政の方も少し見て手を入れて、あとは定期的な維持管理を皆さんに」

⑦ 身近で気軽な買い物環境

▶ シーン 1 日常の用事がまちの中で完結する生活

資源	・新しいイオン／地元野菜・地産地消／かつてのパスカルの新鮮な野菜／魚・肉・惣菜・半調理品／調味料・スパイスなどのこだわり商品 ・ダイエー・イオンの思い出／マクドナルド／文房具・本屋・参考書／エキマエアキ／高校・中学校から立ち寄りやすいセンター地区／地域の見守りの目 ・新しいイオンのテナント／既存の ATM／コンビニ／クリニック／本屋・文房具／ホームセンター・電気屋の需要／駅前に集まりやすい立地
課題・心配事	・日常の買い物は「これが無くなったから買いに行く」だけになりやすい。同じ商品ばかりだと飽きてしまう。生活上欠かせない店ほど、買い物物の楽しさや温かさが必要になる。高齢者には大きすぎない規模がよい一方、毎日通うには物足りなさもある。 ・ダイエー・イオンがあった頃は、子どもが迷子になっても周りが声をかけてくれるような温かさがあった。高校生は放課後にマクドナルドやフードコートで友達と話していたが、今は立ち寄れる場所が少ない。文房具や参考書など、ちょっとしたもののウツディタウンまで行かないと買えないことがある。 ・日常の買い物以外にも、皮膚科・婦人科・耳鼻科・眼科など身近なクリニック、ATM、コンビニ、文房具、本屋、電気屋、ホームセンター的な機能が不足しているという声があった。すべてを大規模に整えるのは難しいが、センター地区で「少し困った時」に対応できないと、生活が外へ流れてしまう。
アイデア	・地元野菜だけでなく、珍しい魚・野菜、半調理で家で焼ける肉や魚介、種類の多い調味料やスパイスなどを置く。イオンのイベントスペースや売場の催しコーナーや特集を定期的に変え、「今日は何を買ってみようかな」と思える売場にする。 ・子どもが最初におつかいできるような小さな買い物環境を整える。中高生が放課後に軽く食べ、話し、文房具や参考書を買える店を入れる。地域の人や店員の顔が見えるようにし、困りごとがあった時に声をかけ合える雰囲気を残す。 ・新しいイオンやサンフラワーなどに、必要度の高い機能を小さく組み合わせる。ATM は残す。コンビニは種類の選択肢を増やす。クリニックモールの集積や、文房具・本・日用品・小型家電・修理相談など、毎日の暮らしの不足を埋める売場・サービスを検討する。
未来に必要な具体的シーン	・夕方、仕事帰りや子育て中の人、高齢者がスーパーに立ち寄っている。いつもの食材を買うだけでなく、「今日は違う魚がある」「この半調理なら焼くだけで家族が喜びそう」「珍しい調味料を試してみよう」と会話が生まれている。小さすぎず大きすぎない、日常の中に少し発見がある買い物の場になっている。 ・放課後、中高生が駅前の店で文房具を買い、マクドナルドやイトインで友達と話している。小学生は保護者に頼まれたパンや牛乳を買いに行き、店員や地域の人が見守っている。買い物の場が、子どもにとって「まちに出る練習」の場であり、若者にとって帰り道に寄れる居場所になっている。 ・駅前で食品を買った後、ATM で用事を済ませ、子どもの文房具を買い、必要があれば近くのクリニックに寄れる。高齢者も子育て世代も、遠くまで車で行かなくても一日の用事をまとめて済ませられる。「買い物環境」が、食料品だけでなく、暮らしの安心を支える小さな生活拠点になっている。

参加者の声：「お魚がすごい豊富で」「今日買ってみようかなとか」「違うお野菜ですごく珍しいお野菜があったり」「目的のものを買いに行くだけじゃなくて」

参加者の声：「ATM は無くさないでほしい」「皮膚科とか婦人科とかあったら」「耳鼻科ももう 1 個くらい」「眼科もすごい混んでる」「セブンイレブンが欲しい」「ホームセンターとか電気屋さんがほんとに欲しい」「小さな本屋さん」

▶ シーン 2 買い物ついでにふらっと立ち寄れる居場所であふれるまち

資源	旧イオン・ダイエーで使われていたイトインや椅子／新しいイオン／エキマエアキ／カフェはさま／マクドナルド・スターバックスなどのカフェ需要／子どもが遊べる小さなスペース／親のサポートサービス
課題・心配事	以前のイオン・ダイエーには、買い物のついでに座れる場所や、顔なじみが集まる場所があった。今は家でも職場でもない「ちょっと外に出て過ごせる場所」が少ない。子ども連れは食事中に子どもを見守れる場所がほしく、高齢者も買い物後に休める席や会話できる場所が必要。
アイデア	スーパーや商業施設の中、または駅前の外部空間に、購入したものを食べられる小さなイトイン、子どもが遊べるスペース、誰でも座れる椅子とテーブルを設ける。中高生や子育て世代が使いやすいファストフード、少し落ち着けるカフェ、親子を支えるサービスを組み合わせる。
未来に必要な具体的シーン	買い物を終えた親子が、フードコートのようなスペースで食事をしている。子どもは近くの小さな遊び場で遊び、保護者は見守りながら一息ついている。高齢者はいつもの席で顔なじみと話し、中高生は放課後に軽く食べながら話している。買い物の場が、用事だけで終わらない、まちのサードプレイスになっている。

参加者の声：「買い物は目的だけを持っていくんじゃない」「サードプレイスみたいな、それがフラワーには全くなかった」「イオンのちっちゃいイトインスペースはそういう場所になっていた」「赤ちゃんが遊べる場所があれば」「マクドナルドがあればいいかな」

参加者の声：「初めて迷子になったのもダイエー」「皆さんが大丈夫とか言ってくれた」「初めておつかいじゃないけど、そういうのを行ける場所」「高校の時とか放課後は絶対にダイエー行きました」「文房具買うのもウツディに行かないといけない」

▶ シーン 3 中心地域以外の居場所づくり

資源	・エキマエアキ／サンフラワー／新しいイオン／駅前という人が通る場所／地元農家・地元商店／かつてのパスカル／つばみマーケット／エキマエアキのイベント経験／イベントスペース／人博 ・ひとはく／深田公園の眺め／サンフラワー／駅前から歩ける距離／カフェ・喫茶店需要／図書館・本・文化的な滞在／SNS や広報、QR コードによる情報発信
課題・心配事	・イオンができると買い物は便利になるが、イオンだけに人が集まり、周辺に人が流れない可能性がある。エキマエアキやイベントはあるが、内容が十分に伝わっていない。地元の新鮮な野菜やこだわり商品を買える場が、日常のルーティンとして見えにくい。 ・カフェはさまやエキマエアキなど、既にある活動が十分に知られていない。人博は行く機会がないと入りにくく、サンフラワーも十分に活かしていない。イオンができて、駅前だけで完結すると、深田公園や人博へ人が流れにくい。
アイデア	・毎週日曜日など、決まった日にファーマーズマーケットやマルシェを開く。地元野菜、パン、コーヒー、惣菜、出張カフェなどを並べる。場所はエキマエアキ、サンフラワー、イオンとサンフラワーの動線上など、買い物客が自然に通る場所にする。

	・人博やサンフラワーに、外から入りやすいカフェや休憩スペースをつくる。深田公園の四季を眺めながらコーヒーを飲める場所、本や展示にふれられる場所にする。駅前・イオン・サンフラワー・人博をつなぐ案内サインや SNS 発信を整え、「今日どこで何をしているか」がすぐ分かるようにする。
未来に必要な具体的シーン	・日曜日の午前、イオンに向かう人が駅前のマルシェに立ち寄っている。地元の野菜を買い、コーヒーを飲み、子どもはジュースの店をのぞいている。「今週は何が出ているかな」と若者や子育て世代も予定に入れ、外から来た人も買い物の帰りに寄っている。駅前からサンフラワー、イオンへ自然に回遊が生まれている。 ・買い物の後、親子や高齢者、若者がひとはく側へ歩き、深田公園を眺められるカフェで休んでいる。本を読み、展示をのぞき、サンフラワーの催しを見てから帰る人もいる。駅前の買い物が、自然・文化・休憩へつながり、フラワータウンの内側を歩く理由が生まれている。

参加者の声:「必ず日曜日にはマルシェがあるみたいな」「ファーマーズマーケットみたいな感じ」「毎週やると分かっていたら日常のルーティン」「外からもね、寄ってみよってなって」「サンフラワーをうまく使えばこの辺一帯が活性化する気がする」

参加者の声:「ひとはくからの眺めがめっちゃいい」「公園の眺めが四季折々の眺めが見れる」「ひとはくの中にカフェを作れば」「豆を挽くぐらいの喫茶店があったらいい」「情報が入ってこない」「SNS」「何を見たらいいかイメージが」